

東海道四谷怪談

登場人物

民谷 伊右衛門

お岩

お袖

直助

四谷 左門

お槓

お梅

伊藤喜兵衛

宅悦

佐藤与茂七

一場 浅草寺境内

ここは参詣客でにぎわう浅草寺の境内。絶え間なく訪れる人々はみな、内なる想いを本堂におさめていく。

おみくじを引くもの、茶店で休息をする家族。境内の店はどこも忙しそうで、客を迎える声と穏やかな笑い声に包まれていた。

こじき1「なんて凶々しいおやじだ。仲間のおきてを破るとは」

こじき2「誰の許可を得てここで商売をしてるんだ」

境内の一角でこのあたりを縄張りにしているこじきたちが、物乞いをする浪人者を捕まえて騒ぎはじめた。

浪人の名は四谷左門。かつては播州の塩谷家の家臣であった。

左門「お前さんたちの社会の作法を知らずに失礼なことをしてしまつた。どうかお許してください」

こじき3「なんだと、お許してくださいですむものか」

こじき4「お前の今日の稼ぎをよこしやがれ」

伊右衛門「いや、いや、ちよつと待ってやれ。当人も心得えちがいだと謝っていることだし」

荒々しく騒ぎたてるこじきたちから、左門を救ったのは浪人者の民谷伊右衛門。左門と同じく塩谷家の家臣だった男。

伊右衛門「これで勘弁してやってくれ」
こじきたち「ありがとうございます」

伊右衛門「大丈夫ですか」

二人は共に同じ主君に仕える身であったが、主君の塩谷判官が江戸城内で刃傷を起こしたことで切腹とお国とり潰しの裁きがくだった。

その結果、塩谷家は断絶し左門も伊右衛門も浪人の身となってしまったのだ。

しかしそれは喧嘩両成敗の法を無視した納得できないお裁きであり、断絶した塩谷家の浪人たちは仇討ちをするのではないかというのが世間の噂になっていた。

左門「ご覧のとおり、落ちぶれてみすばらしい身の上。ご親切にありますがどうございます。お借りしたお金は明日きつと返します」

伊右衛門「あ、いや、お待ち下さいませ、舅どの。たとえお岩と別れましてもあなたは私の親ではありませんか」

左門「だからこそ金を借りたくはないのだ。一度は親子の縁を結んだかも知れないが、既に娘のお岩もこちらに引き取っているからには、今は何の関係もない」

伊右衛門「左門さま、何故お岩を返してくだらないのですか。お岩は私の子を宿しているのです。一体、何があなたのお気にそわないのでしょうか」

左門「それは自分の心に聞いてみなさい。私はお前さんの根性が気に入らんのだ」

伊右衛門「何がでございますか」

左門「お家が断絶する前、国元でお家の公用金が紛失した。私はその犯人を知っていたが、取調べ中に騒動が起こりそのままになってしまった。何もかも黙っているのは私の情けだと思いなさい。だから娘は添わせられないのだ」

伊右衛門「私が盗んだという証拠でもあるのですか」

左門「証拠を見せるとおっしゃるのか。自分の悪事を白状するようなものだぞ。以前、お岩に送られた結納金の一枚一枚にお家の印

が入ってあったわ。それこそが横領のなによりの証拠。黙っているのは舅としての思いやりだ」

伊右衛門「ならば、どうあってもお岩を返してはくたさいませんか」

左門「先ほどの金は必ず返す。しかしお岩を返すことは認められぬわ」
伊右衛門「舅と思うゆえに言葉を尽くして頭も下げたが、大事にすればつけあがる。物乞いまでしているくせに、俺の心がどうだの根性がどうだの。調子に乗るのもいい加減にしろ。身のほど知らずの老いぼれめ」

左門「どうやら本性が出てきたようだな。大事な娘を添わしておいたら売りとばされてしまうわ。それに盗人を身内に持つては家がけがれてしまう。別に女に不自由しているわけではあるまいし、しつこく言わず諦めるがいい。言えば言うほど、その身の破滅になりますぞ。では」

伊右衛門「このことが表に出れば将来の邪魔になる。生かしておくわけには…」

伊右衛門は不気味につぶやくと、左門のあとを追いかけていった。

二場 藪の内地獄宿

四谷左門の娘、お袖は昼は楊枝店の売り子として働き、夜は「おもん」という名で客を取って貧しい暮らしを支えていた。

直助 「こんばんは、失礼するよ」

お袖 「直助どの」

直助 「どうして逃がすものか、待て、お袖」

お袖 「そんなことを言われても恥ずかしくて、顔が合わせられません」

直助は塩谷家が断絶する前、四谷左門と同じ家中の奥田の下男として奉公していたが、そのころからずっとお袖を付けまわしていた。

お家がばらばらになってしまった今は薬売りとなっている。

直助 「お袖さんは親孝行だなあ。左門さまも俺の主人の奥田将監さまも思いがけない騒動で流浪の身となった。お前は苦しい生活を支えるためにこんな仕事までして。他の人がどう思おうとも俺は同情しているから。俺は今では薬売りに転身してよっぽど以前より繁盛している。金はこのとおり相当持っているのだ。一緒になってくれればこんな商売をさせず、親も養って楽をさせてやる」

お袖 「とんでもない。この仕事も親のためにやっているのです。

それにどんなに裕福でも身分のそぐわぬ人と暮らすのは、まっぴらごめんでございます」

直助 「親を思うなら俺が言うことも聞けばいいではないか。このことが左門さまに知れてみる。汚らわしいと大変な剣幕で怒るだろう」

お袖 「その親切はありがたいと思います。ですが、どうも肌身を汚すこととは…」

直助「出来ないような女が何故、このような勤めに出ているのだ」

お袖「それは生活の手段のため。客にわけを言つて頼めば大概は許してくれます」

直助「それじゃあ、稼ぎもそう良くはないだろう。同じ家中にいたよしみだ。この金で親に着物でも買ってやればいい」

お袖「同じ家中にあつただけで、こんなにたくさんのお金を…」

直助「浪人にとっては大枚だろうが、商人の身となつた俺にとっては何でもないのさ」

お袖「では、その心に感謝して少しの間そのお金を」

直助「貸すというのは他人行儀だ。いくらでもあげましょう」

お袖「ありがとうございます」

直助「礼ばかりでは物足りないな」

お袖「どうか、それだけは」

嫌がるお袖の手をとり奥の部屋に入ろうとしたとき、店の者から声をかけられた。どうやら、次の客がお袖を指名しているらしい。

すんでのところ直助から逃れられたお袖は、休む間もなく次の客の部屋に押しやられた。

お袖「もしお休みになれましたか」

与茂七「一人で寝るくらいならここへは来ないさ。さあ、遠慮せずにこっちに入りなさい」

お袖「私はあなたにお願いがございます」

与茂七「何だ。床へも入らない内からお願いとは。どうせろくな話ではあるまいが話してみなさい」

お袖「はい。私は元は武家の娘ですが、訳あつて父さんは浪人。一人おります姉さんはお子ができた上に病気の身。このようなあさましき生業をいたしますのも、家族のためでございます。どうか、一緒に寝ることはお許しください」

与茂七「なるほど、聞けば気の毒なことだ。家族のためにこのようなことを。しかし、それなら吉原に行つてよい花魁にでもなつたらどうか」

お袖「これは父さんにも姉さんにも内緒のこと。ただ断じて肌を汚すことは出来ません」

与茂七「さては、いいなずけの男でもいるということか」

与茂七「お袖じゃないか」

お袖「あなたは与茂七さん」

お袖を指名した客は、いいなずけの佐藤与茂七であつた。左門や伊右衛門と同じく塩谷家に仕えていた男である。

主君の仇を討つために仲間と共に高家の動向を探っている。

与茂七「お袖、お前は俺のことをすっかり忘れ果ててこのような勤めに
出ているのだな。もつとも騒動でちりぢりに別れ、それつきり
便りもしない俺が悪いのだが」

お袖「与茂七さん、その言いようはあんまりです。今、お話したとおりこれは家族のための勤め。あなたこそ私というものがありながら、こうしたところへ遊びに来て。そんな時間があるなら便りの一つでも書いてくだされば良いのに。本当に身勝手な言い分。逆恨みもいいところですよ」

与茂七「そう言われれば、一言もない」

お袖「今までさぞかし、あちらこちらと行つていたのでしょう」

与茂七「夢ならさめるな」

直助が入ってくる。

直助「よくも俺から代金を取つたまま別の客に回したな。」

この詐欺師め。盗人め」

与茂七「そういうお前はどこかで見たような男だが」

直助「見たはずだろうよ。以前は同じ塩谷の家中の奥田家に仕え奉公をしていたのだ。今は薬売りの商人さ。その女は俺が買ったのだ。さつさとこつちに回してくれ」

与茂七「武士の女房を金づくで他の男に添い寝させるなど許すはずがない」

直助「武士だと。たいそうなもんだな。今ではただの小間物屋ではないか」

お袖「ちよつとの間、ふところに入れておいたのがこちらの落ち度。それを返せば言い分もないでしょう。惚れた男といやな男を比べてみたら目に見るのさえも嫌になります」

直助「それほどまでの惚れた男か」

そのとき、仲間の薬売りが直助を探しあててやってきた。薬の売上金を親方に渡さなかったことで出入り禁止となったことを知らされた。

与茂七「さつきから金のことで大きな口を叩いていたが、人の金を引きずり込んで金持ちと言うなら、幕府の蔵の番人はみんな金持ちさ。さつさと行きやがれ」

直助「なぶりものにしやがって」

直助は不気味な笑みを浮かべ、仲睦まじく帰るお袖と与茂七の提灯を目当てに後をつけて行った。

与茂七「庄三郎どの、お気を付けください。敵に素性を知られそうになったのではないか。この連判状も危うく敵の手に渡りそうになった。主君、塩冶判官の無念を晴らすため日々を耐えている同志の苦勞が水の泡になってしまいます。

私はこれからこの連判状を持って鎌倉に向かいます。なに、衣服の交換：なるほど、目くらましですな。それではこうして：この提灯は私には必要ないもの。これもお持ちください。それでは庄三郎どの、必ずまた生きてお会いしましょう」

三場 浅草うら田んぼ

左門「世は移り変わるものだが、思いがけないことで家中はちりぢりになってしまった。貧しくとも他の主君には仕えず、心を清く持って生きねば。それにしても、あの伊右衛門め。全てが口先だけで心は非常に邪悪だ」

四谷左門は苦々しい思いで、民谷伊右衛門の名前を口にしました。

かつては二人とも、播州の塩冶家の家臣であったが、主君の塩冶判官が江戸城内で刃傷沙汰を起こしたことで、切腹とお国とりつぶしの裁きが下った。その結果、塩冶家は断絶し左門も伊右衛門も浪人の身となってしまうのだ。

左門「あの男には忠義も何もあつたものではない。あのような盗人に娘の岩は添わしておかれぬ。復縁などんでもない。何と言おうと納得出来るものか。横領の証拠は情けで黙っておいてやつたが、さてどうしたものか…」

左門はぶつぶつとつぶやきながら歩いていた。すると突然、生垣の中から歩みを妨げる黒い影が現れた。

左門「お前は…伊右衛門か…」

いきなり肩口を斬られ、ふらふらと逃げまどう左門。やがて伊右衛門の刃は残酷にも急所をつらぬいた。左門はその場に倒れるとびくりとも動かなくなつた。

伊右衛門「強情なジジイめ。斬られるのは当たり前だ」

ちようど同じころ、この浅草裏田んぼではもうひとつの殺人が繰り広げら

れていた。

直助の出入が提灯を持ったその男を刺しつらぬいた。そして身元が分からぬよう、直助はその男の顔の皮を剥いだ。

直助は左門と同じ、家中の奥田の下男として奉公していた。

たった今、殺した男がかつて仕えていた主人の子息、奥田庄三郎であることを今はまだ知る由もない。

直助「ざまあみやがれ」

伊右衛門「その声：奥田に仕えていた下男の直助か：何をしているのだ」

直助「何をと言われても：その声はもしや民谷の旦那ですかい」

伊右衛門「：殺したのか」

直助「：ああ。怨みのある佐藤与茂七を、今ここで」

伊右衛門「俺も女房の親である四谷左門を、たった今やったところだ。

お岩と無理に別れさせられた挙句、公用金を盗んだことまで気付かれたからには、あのジジイを生かしておくわけにはいかな
い」

暗い田んぼのあぜ道に殺人者が二人。沈黙のうちに芽生える仲間意識。
そこに不意に近づいてくる足音があった。

お岩「ずいぶん夜もふけたというのに、父さんもお袖も何処で何をし
ているのやら」

お岩は提灯の灯りを頼りに父と妹を迎えに来ていたのであった。
向こうのほうから、もうひとつの足音が近づいてくる。

お袖「ごめんなさい。急いでいるもので」

お岩「そなたは妹のお袖ではないか」

お袖「姉さん、どうしたのです」

お岩「父さんとお前の帰りが遅いので迎えに出たのですが、何だか胸

騒ぎがして…」

お袖「姉さん。今日、不思議にもいいなずけの与茂七さんにお会いすることが出来ました。どこかへいらっしやるとかでお別れしましたが…私も何だかしきりに胸騒ぎがしています…」

お岩「与茂七さまは敵の高家の動向を探索している身。あまり心配しすぎないように」

妹を元気づけるために近寄ろうとしたとき、お岩の持っていた提灯が足もとの光景を照らし出した。

お岩「ああ…何とも気味の悪い。たいそうな血がそなたの足もとに」

お袖「姉さんのほうにも血がこぼれております」

なまぐさい血の匂いがあたりに立ち込めている。見まわすと真っ赤な血にまみれた死骸が目に入った。

お岩「ああ…父さん、父さん。どうなされたのですか。なんでこんな事に…」

血まみれの左門に近づこうとしたお袖は何かにつまづいてよろけた。見るとそこには見覚えのある着物の柄。

お袖「この着物は…まさか与茂七さん。一体、誰がこんなむごい事を」

二人は死骸にとりすがって泣き叫んだ。

伊右衛門「よお、お前は女房の岩ではないか。一体、どうしたのだ」

お岩「あなたは伊右衛門さま。父さんが、父さんが殺されて…」

伊右衛門「これは義父どの。もう少し早く来ていればこのような目にあわせはしなかったものを。なんと無念なこと…」

お岩「つらい貧乏生活でも、父さんには少しでも楽をさせてあげたい
と、思つて暮らしてきたのに、こんなことになるなんて…もう生
きてはいられません」

伊右衛門「今、自害などしたら親の敵は誰が討つ。それに俺という夫があ
りながら目の前で果てるとは。親孝行にはなつても妻としての
貞節はどうなるのだ」

お岩「でも、私たちは今は夫婦ではないのに…」

伊右衛門「何を言っているのだ。無理矢理に別れさせられたりはしたが、
わが子を宿す女房を見捨てられるものか。義父どのの敵は俺が
討つてやる」

伊右衛門さまは私を愛してくれている。

愛してくれている。大切に思つてくれて…

私を…

大切に思つてくれている。愛してくれている。

伊右衛門「これからはずっと一緒だ」

お岩は幸福を受け入れていた。そこには何の疑いもなかった。親の命に背
く自分自身への罪悪感を少しばかり感じてはいたが。

直助「お前はお袖さんじゃないか、一体どうしたんだい」

与茂七の死骸から顔をあげたお袖は苦々しい思いで、直助の顔を見た。

直助「…なんとこの着物の柄に提灯。もしかこれは、与茂七さまでは

ないか」

伊右衛門 「そちらは奥田の下男、直助じゃないか。お袖のいいなずけの与茂七までも…おそらく義父どのの助太刀をしようと思つて、やられてしまったのだらう。曲者はさうとう腕の立つ者か…」

お袖 「こんな別れになるぐらいなら、いつそ会う前に死んだと聞いたほうが諦めがついたのに…夢のように儂い夫婦の縁でした」

直助はいきなり伊右衛門の脇差を引き抜いて、自分の腹を切ろうとした。

伊右衛門 「一体どうしたのだ」

直助 「俺は腹を切らねばならんです。身分違いを承知の上でお袖さんに横恋慕しておりました。金を派手に使い無理矢理くどこうとお袖さんに言い寄ったところで、与茂七さまと言ひ合いになつてしまい、挙句に与茂七さまがこの有様。今のままじや俺に疑いがかかるに決まっています。あの時は頭に血がのぼつて怨んでいたが、忠義一途の与茂七さまの前でお袖さんを自分のものにしてよとは…思えば思うほどお恥ずかしいこととございます…」

伊右衛門 「なるほど。そういうことならお前の身に疑いがかかると思つても、もつともだ。だが、お前は刀を持つているわけでもないし、まして下男風情にこのふたりが易々と切られるとも思えない。そう考えれば、お前の仕業でないことは明らかだらう」

直助 「しかし、それでは…」

伊右衛門 「それほどまでに悔いているのであれば、犯人を探し出しお袖に敵を討たせてやるほうが、お前の無実を証明することになるのではないか」

お袖 「そんなことは…」

直助 「それは望むところでございます。この身の潔白と今までお袖さまを無理につけまわしたその償いのためにも、敵討ちの助太刀

をさせていただきたく思います」

お袖「そんなことを言われても…：さんざん愛想を尽かしたそなたに今更、力を借りようとは思いません」

伊右衛門「俺と岩は義父どのの敵を討つ。お袖は直助に力を借りなければどうにもなるまい。そうだ、直助と仮の夫婦になれば敵に油断させる手立てにもなるな」

お袖「仮初めにも夫婦となるのは、与茂七さまに申し訳がたちません」

直助「夫婦というのは世間の手前だけのことです。夜は別々、寢床も離れて寝ます」

お岩「お袖や、ここは仮の夫婦となりなさい。直助どのとやらの言葉が本当かどうかはともかく。敵は案外近くにいるかも知れませんが。ここは私の言う通り、ひとまず仮初めの夫婦になるのが良からうと思えますよ」

お袖「…分かりました。姉さんの言う通り、従うことにしましょう」

直助「おお、そんならうわべばかりの夫婦となつて…」

伊右衛門とお岩。直助とお袖。それぞれの思惑を胸に秘めたまま、惨劇は静かに幕を下ろした。

四場 伊右衛門浪宅

伊右衛門「暮らしがこんなに貧乏なのにガキまで産むとは。なんて気が利かない女房だ」

伊右衛門は内職の手を動かしながら吐き捨てた。収入は僅かではあるが浪人者にとっては暮らしを支えるありがたい仕事である。

お岩は伊右衛門のもとに戻ったのち男の子を産んだが、産後の肥立ちが悪く床にふせっていた。

宅悦「さてさて、薬を温めてあげましょう」

あんま屋を営む宅悦が隣の部屋の様子を見に行く。伊右衛門にはお岩を案ずる気持ちなど少しもない。

一緒に暮らしてみるとうっとおしいばかり。お岩の何もかもが伊右衛門をいらつかせた。

隣の部屋から赤ん坊の泣き声が聞こえてくる。伊右衛門は苦い顔をして耳をふさいだ。

お榎「ごめんください。私は伊藤喜兵衛の屋敷から参りました」

宅悦「おお、伊藤どのよりの使いか。さあ、こちらへどうぞ」

宅悦が戸口を開けると、そこには伊藤家の女中のお榎が立っていた。最近、このあたりに別宅をかまえた伊藤家から伊右衛門は色々と頂きものをしている。

伊藤家は主君の仇に仕える家であった。仇討ちなどは眼中にない伊右衛門だが世間の手前、おおっぴらな付き合いを遠慮している。

お槓「本日はご出産のお祝いをお届けに参りました」

伊右衛門「これはこれは、いつもご丁寧にありがとうございます。喜兵衛どのに、よろしくお伝えください」

お槓「かしこまりました。ところで、伊右衛門さま。この粉薬は伊藤家に代々伝わる妙薬。どうぞ、お岩さまにと主人喜兵衛より預かって参りました」

伊右衛門「なんと…何から何まで。これできつと岩も元気になると思います」

お槓「それでは、私はこれで」

お槓が帰ると、隣の部屋から青白い生気のない顔をしたお岩が出てきた。

お岩「伊右衛門さま。これは先ほど、あの子にといただいた産着です。

この頃、伊藤さまには何から何までお世話になっております。どうぞ、お礼に行ってくださいませ」

伊右衛門「しかし…」

お岩「今は浪人の身ですから、近所のお付き合いとお考えください。私もすぐにでもお礼に伺いたいぐらいです」

伊右衛門「確かに挨拶には行かねばなるまい。しかしこの格好では…」

お岩「宅悦どの。奥のたんすの引き出しに羽織がごございます。どうか、取ってきてくださいませ」

宅悦「分かりました」

伊右衛門「まだ羽織をとっておいたのか…女房というのは素晴らしいものだな」

名ばかりの武士。そんなものに執着するとは愚かなことだ。

伊右衛門「そうそう、これは喜兵衛どのがお前のためにと下さった家伝の薬とのことだ。あとで飲むがいい」

お岩「ありがとうございます。お湯が沸いたら早速飲んでみることにいたします。行ってらっしゃいませ」

伊右衛門さまは私を愛してくれている。

お岩「男の子を産んだというのに喜んでくれもしない」

私は伊右衛門さまを信じている。

お岩「あの冷たい目。生きた心地もしない」

大切に想ってくれている。

お岩「伊右衛門さまの優しさは一体どこにあるのか…今はもうお父さんの敵をとるために我慢しているようなもの」

頭に挿したべつ甲の櫛を手に取りお岩はぼとりとつぶやいた。今は亡き母の形見である。

お岩「身体も一向に良くはならないし、きっと私の命はそう長くはない。これぐらいは、せめてお袖に…」

宅悦「奥さま、お湯が沸きましたのでお持ちいたします」

お岩「ありがとうございます。これで少しは良くなるでしょう」

お岩は粉薬を白湯とともに一気に流しこんだ。それから、ありがたいと思ひ伊藤家に向かい手を合わす。

次の瞬間、激しい苦しみがお岩をおそった。

お岩「ああ…苦しい。顔が…顔が熱い…」

宅悦「奥さま。どうなさいました、奥さま」

お岩「この…薬を飲んだら急に…ああ、顔が熱い。顔が…」

舞台が伊藤家にうつる。

そのころ、伊藤家に礼に行つた伊右衛門は大そうなもてなしをうけて、すつかり気分を良くしていた。

喜兵衛「伊右衛門どのに折り入つて話がある。お前は席を外してくれ」

お楨「かしこまりました」

二人きりになると喜兵衛は伊右衛門の前に小判をおいた。

伊右衛門「これは一体…」

喜兵衛「伊右衛門どの。ぶしつけではあるがこれを受け取っていただけないか」

伊右衛門「しかし、これほどの大金。何かわけがおありでしょう」

喜兵衛「ええ、その訳は…」

奥からきれいに着飾つた娘が出てきた。恥ずかしさからかうつむいているばかりである。

喜兵衛「これはわしの孫娘のお梅でございます。どういふ縁かは分かりませんが、あなたさまへの恋の病により、夜も眠れず食事も喉を通らなくなりました。それでここに別邸を建て移ってきたのです。さあ、お梅や、お前の気持ちを伊右衛門さまに伝えなさい」

お梅「愛しい伊右衛門さま。奥さまがあると分かっているながらも想いはただ募るばかりでございます。忘れようと思っても到底忘れることは出来ません。あなたのお傍にいられますなら召使いでも構いません。どうぞ、私の願いを叶えてくださいませ」

喜兵衛「お聞きの通りです。孫の気持ちを受け止めてくださいませんか」

伊右衛門「いや、しかし…お岩の手前、それは…」

喜兵衛「どうしてもかないませんか」

お梅「願いが叶わないならば…いつそ…(剃刀で首を切ろうとする)」「喜兵衛「これ、お梅。やめなさい。伊右衛門どの、どうあってもこの子の気持ち、受け止めてはやれませんか」

伊右衛門「お岩を捨てては世間の手前が…いや、こればかりは…」

喜兵衛「そうとあらば伊右衛門どの、この喜兵衛を殺してください。どうか私を殺してくださいませ」

伊右衛門「お待ち下さい。なぜ私があなたを殺さねばなんのですか」

喜兵衛「私はとんでもないことをしてしまいました。孫の願いを叶えようと思っても、伊右衛門どのには女房がいる。この子の想いが不憫でどうにかならないか考えた挙句…お岩どのに恐ろしい薬を差し上げました。命に別状はありませんが、その薬は飲めばたちまち顔の形が崩れて変わってしまうというもの。あなたがお岩どのに愛想を尽かして夫婦別れすればと思ったのです」

伊右衛門「それは…何ということを…」

喜兵衛「伊右衛門どの。お梅とのことを受け入れてくれれば家も財産も全とお渡ししよう。出世も思いのままに」

金。地位。若い女。断る理由がどこにある。

伊右衛門「承知しました。お岩とは離縁いたしましょう」

喜兵衛「ありがたい。伊右衛門どの、心からお礼申し上げますぞ。そうと決まれば今晚、早速仮の婚礼をとりおこないましょう。思い立ったが吉日とやらだ」

舞台は再び、伊右衛門宅へ。

宅悦「お岩さま、おかげんは如何ですか」

お岩「いただいた薬を飲んだら、途端に顔が熱く苦しくなりました」

宅悦「突然のことに驚きましたが、落ち着かれたようで安心しました。

おっと、これは失礼。すっかり日も暮れていたのに明かりもつけず。しかし、薬でなぜあのようなことに…」

明かりで照らされたお岩の顔を見る宅悦。恐ろしさで震えが止まらなかった。

お岩「どうかしましたか」

宅悦「…いえ、ちよっと…その…ああ、そのように良くなるとは良薬なのでしょう」

お岩「ですが、お酒を飲んだような気分の悪さが今もしております」

宅悦「良薬は口に苦しとも申しますので…そうそう、油がきれかかっておるので、すぐを買って参ります」

慌てて家を出る宅悦。入れ替わりに伊右衛門が帰ってくる。

お岩「宅悦どの。油は買ってきていただけましたか」

伊右衛門「いや、俺だ」

お岩「伊右衛門さま。お帰りなさいませ」

伊右衛門「気分はどうだ」

お岩「さきほどの薬を飲んだら、いきなり発熱し顔が痛くなりました」

伊右衛門「なに、顔に痛みがあったのか…」

お岩の顔を見て、言葉を失う伊右衛門。

伊右衛門「…薬のお陰だろう。顔色はだいぶ良いようだ」

お岩 「しかし気分は以前と同じまま。私はきつとそう長くはないと思います。命は惜しくありませんが、残されるわが子がどうにも不憫で…伊右衛門さま、どうかしばらくは後妻など迎えませんように…」

伊右衛門 「新しい女房ならじきに迎える。世間にはよくある話じゃないか」

お岩 「あなたはどこまで冷酷で自分勝手なのでしょう。それを承知で夫婦でいるのも、父さんの敵を討ってもらいたいためです」

伊右衛門 「親の敵討ちなど、今どき古い考えだろう。もうやめにしよう。それが気にいらなければ、他に主人を持って手を貸してもらおうがいいさ」

お岩 「ええ、そう言われるならば出て行きましょう。ただ、この子を後妻に育てさせるおつもりですか」

伊右衛門 「それならこのガキも連れて行け。新しい門出にガキなど邪魔なだけだ」

お岩 「呆れたお人。わが子さえも見捨てるとは」

伊右衛門 「それがどうした。大体、最初に俺を裏切ったのはお岩。お前のほうだろう」

お岩 「私がいつあなたを裏切ったのですか」

伊右衛門 「お前はあんまの宅悦といい仲だろう」

お岩 「どこからそんな出たらめを…」

私が一体何をしたのか。一体何がいけなかったのか。私はただただこの人を愛していただけなのに。それがそんなにいけなかったのか。

伊右衛門 「急に金が必要になったのだが…おお、これは丁度いい」

お岩 「これは母さんの形見の櫛。どうか、これだけはお許してください」

伊右衛門 「俺も金が必要なのだ。そうだ、この着物をもらっていくとしよう（お岩の着物を剥ぐ）ざまあみやがれ、恨むなら好きにだけ恨むがいい」

お岩に冷たい言葉を浴びせ、家を出て行く伊右衛門。
すると出会い頭に、あんまの宅悦と出くわした。

宅悦「これは伊右衛さま。お岩どのが…」

伊右衛門は宅悦にお岩に言い寄ることを強要した。宅悦との関係をつち上げてお岩を追い出す魂胆だ。そして毒薬のことまでをすっかり話してから、

伊右衛門「宅悦に金を握らせて」しくじったら、お前を殺すぞ」

脅しをかけてその場をあとにした。

宅悦「…奥さま、ただ今帰りました」

お岩「宅悦どの。さきほど伊右衛門さまが戻ってきたのですが、私の着物まで取り上げて…」

宅悦「お岩どのも苦労が絶えませんな。これはいつそ亭主を変えたほうが良いかもしれませんが（お岩の手を取り）これは女房が亭主で苦勞するすじです。さつさと切ってしまったほうが」

お岩「武士の女房にこのようなことを」

宅悦「おそらく伊右衛門さまはすっかり心変わりしております。そんな男に関わって苦勞するよりかは私の女房になられて…」

お岩「なんと無礼なことを。宅悦どの、ことによっては許しませんよ」
宅悦「これはとんでもないこと。今、申し上げたのはみんな嘘です。

お岩さまの今のお顔では私でも嫌でございます。そのお顔は…まことに気の毒なことに…」

お岩「…私の顔がどうかしたのですか」

宅悦「これでお顔をご覧くださいませ」

お岩「これが…私の顔…」

宅悦「お気を確かにお聞きください。これは隣家の伊藤喜兵衛さまが

孫娘を伊右衛門さまと結婚させるための計略です。

毒薬でお岩さまの顔を変え、伊右衛門さまと別れさせる算段。

私が奥さまに言い寄ったのも伊右衛門さまに脅されてのこと
でございます」

お岩「そんなこととは知らずに、あの薬にありがたいと手を合わせた
とは…思えば思うほど悔しい」

宅悦「伊右衛門さまは今夜ここで仮の祝言をあげ新妻を迎えます。

その支度金ほしさに奥さまの着物を持って行ったのでしよう」

お岩「私はこのまま身を焦がしながら死ぬでしょう。息のあるうちに

喜兵衛どのにこの礼を言わなければ」

宅悦「いや、しかしそのお姿では…」

お岩「せめて女の身だしなみ。身なりを整えてから喜兵衛親子に礼を
言いに行くことにしましょう」

お岩は母の形見の櫛で弱々しく髪を梳かした。すると髪はもつれてこつ
そりと抜け落ちた。髪の中からたらたらと血がしたたり落ちる。

お岩「私が死ねばあの人は伊藤の娘と結婚する。こんなにうらめしい

ことは他にない。おのれ…伊右衛門どの…伊藤親子ともども、

このままで済ませてなるものか。この恨み、死んでも忘れるも
のか…」

お岩は呪いの言葉をつぶやきながらよろよろと歩き回った。もはやその
目に何がうつっているのか。髪はどんどん抜け落ち、あたりはこの世の
ものとは思えない有様になった。

宅悦「こんな…こんな家にいれるものか」

伊右衛門が戻ってくる。お岩と宅悦の姿はない。

伊右衛門「なんだ、あいつは何処に行った。お岩もいないところを見ると、
上手くつれだしてくれたようだ。しかし、こんな部屋では花嫁
を迎えることも出来ないな」

汚れた部屋を片付け婚禮の準備を進める伊右衛門。血にまみれた髪の毛
はまとめて近くの川に捨てた。

先ほど、お岩から奪おうとしたべっこうの櫛が髪に絡まっていたが、そ
れには気付かなかった。

喜兵衛「伊右衛門どの」

伊右衛門「これはこれは、早速お梅をおつれただいて」

お梅「本当にお宅へおしかけてしまつて……」

喜兵衛「ときに伊右衛門どの、お岩どの」

伊右衛門「どうやら家に入りにしていたあんまの男と関係を持ち、赤ん坊
を置いたまま二人で家を出たようです」

喜兵衛「それなら今晚はここに泊まることにしよう。なに、明日には乳
母を見つけてやる。それまでの辛抱だ」

伊右衛門「ありがとうございます」

喜兵衛「お梅、これはお前のお守りだからしっかりと身につけておきな
な」

お梅「はい。身につけてはおきますが、心配なのはお岩さま……」

喜兵衛「さて、今夜はわしが乳のない乳母となって赤ん坊の面倒を見て
やろう」

喜兵衛が部屋を出て行く。

伊右衛門「お梅、せっかく夫婦になれたのだからうつぶいてばかりいな
いで、かわいい笑顔を見せておくれ」

お梅 「はい。伊右衛門さま」

部屋の奥からお岩が出てくる。

お岩 「うらめしや…伊右衛門どの…」

伊右衛門 「…お前は…」

お梅 「どうかありませんか」

伊右衛門 「…見えないのか」

お岩 「民谷の血筋、伊藤喜兵衛の血筋ともに絶やしてやる」

伊右衛門 「まようたな、お岩」

お岩 「きたれや…伊右衛門どの」

伊右衛門 「近寄るな」

お梅 「…伊右衛門さま…」

伊右衛門 「死霊め、おとなしく成仏しろ」

お梅 「…おじいさま、伊右衛門さまが」

お梅、部屋を出る。あとに続いてお岩も出て行く。

伊右衛門 「…これはお岩のたたりか」

伊右衛門、慌てて部屋を出る。悲鳴が聞こえてくる。

五場 深川三角屋敷

ここは深川の寺町。生垣に卒塔婆が立っているようなさびしいところで、お袖と直助は仮の夫婦となって住んでいる。

寺が近くにあることから、お袖は墓参りの線香や切り花を売って細々と生計を立てていた。

お袖「今日はお父さんと与茂七さんの百か日の命日。同じ日に同じ場所です。親やいいなずけを災難で失うとは。直助どのと仮の夫婦ではあるけれど、これも敵を討ってもらうためのこと」

直助が帰ってくる。

直助「日が暮れたというのにまだいたのか。たいそう稼ぐねえ。それに引きかえ俺は今日は獲物にありつけなかったよ」

お袖「もうあまり殺生をしないほうが」

直助「馬鹿を言え。それではうなぎ搔きが生活できやしない。そうだが、これはお袖への土産にと思ったものだ」

お袖「…この櫛はどこで」

直助「堀でやすに引つかかかってきたものだ。見覚えでもあるのか」

お袖「あるどころかこれは姉さんの櫛です。お母さんの形見だと言つてとても大切にしていたもの。いつか私に譲ってくださいと言つていたのになぜ川の中に…」

直助「そのような櫛など同じものはいくらでもあるのではないか」

お袖「いえ、他のものとはかくこの櫛ばかりは間違えようがありません。なにかあったのかも知れない…とにかく明日にでも姉さんの所に届けましょう」

直助「いずれお前がもう約束ならわざわざ返しに行かなくても、もらつてしまえばいいのではないか」

お袖「でも…義理の姉さんのものだから…」

お袖の母は四谷左門と再婚したのち他界した。両親をなくした今、義理の間柄であれど、お岩だけが唯一の大切な身内であった。

直助「はいはい、わかりました。それにしても女というものは、こんなものを親の形見だとか妹に譲るだかで大事にするのだから、まったく情が深くて執念深いものだ」

外であんまの笛が鳴っているのを耳にとめると直助は呼び止めた。

直助「おーい、あんまさん」

宅悦「およびなさいましたか」

直助「こつちだこつちだ。ひとつ頼むよ」

宅悦「かしこまりました」

直助「ああ、良い気持ちだな。その辺りをもっと強くしてくれ」

宅悦「はい」

直助「頭も梳かしてくれないか」

宅悦「それでしたら、ええと（お袖に向かって）すみませんが、その

櫛をお貸しいただけますか」

お袖「この櫛で直助どののきたない髪を梳かされたらたまらないわ」

宅悦「ありがとうございます。はて…この櫛はどこかで見たことが…

そうだ、この櫛にはとんでもない話がありますよ」

お袖「…それはどんなことでございますか」

宅悦「どこから買ってきたものかは知りませんが、この櫛は四ツ谷町に住む民谷伊右衛門という浪人者の女房、お岩さまという女の挿していたものにそっくりだ」

直助「なにか詳しい事情を知っているのか」

お袖「そのお岩さんという人はどうかなさったのですか」

宅悦「ええ、それはもう大騒動でした。その人は亭主に殺されたようなものだ」

お袖「ええっ」

直助「それは大変なことになった」

宅悦「お二人とも、お知り合いかなにかですか」

直助「知り合いもなにも、そのお岩という女はこいつの姉だよ」

お袖「それは本当のことでございますか」

宅悦「いや、それはまあ…：本当のことではあるが…：そんな縁つづきとも知らずにとんでもないことを」

お袖「それで、姉さんは何の罪があつてそんな目に…：」

宅悦「詳しいことは分からないが、早い話、亭主が女房に飽きがきて他の女に惚れたことに、お岩さまがやきもちを妬いたのが始まりらしい。結局、伊右衛門どのはお岩さまを死に追いやり、やけになつたか気がふれたかで、そのほかに二、三人殺して姿を隠したということですよ」

お袖「夫が妻よりも偉いからと、罪もない姉さんをそのような目に遭わせるとは。あんまさん、伊右衛門の場所を教えてください」

宅悦「わしは何も知らんです」

お袖「そんなことを言わずに。さあ、もっと詳しく聞かせてください」
宅悦「いや、本当にわしは…：あつ、これはすっかり忘れておつた。今夜、お得意さまの療治をする約束があつたのです。どうか、この手を離してください」

直助「お袖、いい加減かわいそうだから帰してやれ」

宅悦、慌てて外に飛び出して行く。

お袖「父さんだけでなく姉さんまでも亡くなつたとは…：私はこれからどうすれば」

直助「二人が亡くなつたからには敵を討つのはお前しかいない」

お袖「あなたは手伝つてはくさいませんか」

直助「お前とは仮の夫婦。本当の夫婦なら放つておくものか。左門どのもさぞかし悔しがっているだろう」

お袖「たとえ女であつてもこのままにしておくものですか」

直助「お前は三人の敵を女の身ひとつで討とうというのか。それはさすがに無理だ。諦めたほうがいい。赤の他人の俺でさえ悔しくてならない」

お袖「…いえ。親と夫の百か日、喪があけたので直助どのと夫婦になります」

直助「それは悪かろう。お前の弱味につけこんだみたいで、与茂七どのに申し訳ない」

お袖「操をやぶって操をたてるのです。敵を討ってもらわないと与茂七さんも浮かばれない」

直助「それなら今夜から本当の夫婦に」

お袖「はい。さあ、力になってください」

直助「ああ、敵を討ってやろう」

直助はやつとの思いでお袖をくどき落とした。すっかり酔いしれた直助はためらいがちにしているお袖の手を取り、寝床へと向かった。お袖は心の中で与茂七に手を合わせた。

暗転

与茂七「ごめんください、ごめんください」

直助が出てくる。

直助「誰だ、いったい」

与茂七「何かおかしいなことは起こっていませんか。このあたりに人魂のようなものが見えたのだが」

直助「お前は…確か佐藤与茂七。するとこいつは幽霊だ」

与茂七「幽霊というが俺にはさっぱり見えない。どこにいるんだ」

直助「幽霊だけ欲しいとお前のことだ。幽霊のくせに何食わぬ顔で幽霊を探すとは凶々しいやつ」

与茂七「俺が幽霊だと。それは人違いだ」

お袖が出てくる。

お袖「今、与茂七さんによく似た声が……」

直助「だから幽霊だと言ってるんだ」

与茂七「お袖じゃないか。不思議なところで会ったものだな」

お袖「ああ、幽霊じゃない。本当の与茂七さんだわ」

与茂七「お袖はなぜここにいるんだ」

直助「この女か、これは俺の女房さ」

与茂七「俺はまだお袖に離縁状を渡した覚えはない。誰の許しを得てのことだ」

お袖「訳を話せば長くなります。私はつきりあなたが人手にかかって亡くなったとばかり思っていました」

直助「本当の夫婦となった今では言い訳をするほど罪が深くなる。この女を俺にくださいよ。いや、確かにもりましたよ」

与茂七「女房をくれとはよく言ったものだ。その男らしさに免じてお袖をやりたいところだが、そうはいかない」

直助「お袖はどちらを選ぶことか」

お袖「すべて私の気持ちひとつに任せていただけですか」

与茂七とお袖は奥の部屋に行く。

直助「それにしても不思議なことがある。浅草の裏田んぼで殺したはずだが……とすればあの時、俺が殺したのは誰だったのか。何にせよあの男はばらしてしまわねば」

ゆっくり奥の部屋に向かう直助。お袖が出てくる。

お袖「まあ。お待ちください、直助どの」

直助「お前は与茂七をかばいだてする気だろ」

お袖「男のくせに余計な心配をして。いったん枕をかわしたからにはどこまでも夫婦。それよりも与茂七どのを殺す手引きを…」

声をひそめて相談する二人。

直助「酒に酔わせて眠ったところを…」

お袖「明かりを消したらそれを合図に…」

直助は心得たとばかりにしたり顔で姿を消した。

与茂七「直助はどこへ行ったんだ」

お袖「用事があるとかで出かけました」

与茂七「そうか」

お袖「与茂七さん、さつき奥で言うたとおりに…」

与茂七「お前が直助に酒を勧めて正気をなくした時に狙うんだな」

お袖「明かりを消したらそれを合図に…」

与茂七はその時が来るのを待って奥に姿を隠した。

お袖「私の身の上は不運なめぐりあわせであったような気がする。

実のお父さんから私には兄さんがひとりいると聞いたことがあるけれどお顔も知らない。義理のお父さんも姉さんも亡くなってしまった。敵を討ちたいばかりに直助どのに身を任せてしまっ…こうなってはもう生きてはいられない」

お袖は懐から守り袋を取り出すと、中に入っている紙をひろげて見た。その紙にはお袖の生まれた年月日と両親の名前が書かれている。

お袖「私が死んだら直助どのに兄さんを探してもらって、せめてこの

守り袋を届けてもらいましょう」

お袖は呟くと明かりを消して布団に身を横たえた。

暗転

明かりがつくと苦しむお袖。呆然としている直助と与茂七。

直助「なんでお袖が…てっきりお前だと思ったのに…」

与茂七「お袖、お袖。大丈夫か、どうしてこんなことに」

お袖「明かりを消すという合図でふたりの夫を手引きしたのは、私が命を捨てるための計略。与茂七さん、あなたという人がありませんが直助どのと夫婦になったのは、父さんや姉さんの敵を討ちたかったから。そして、亡くなったと思っていたあなたの仇も討たねばと。直助どのの力を借りようと枕をかわしました。与茂七さんの手にかかって死ぬのがせめてもの言い訳です。直助どの、これをたったひとりの兄さんに…どうか探して渡してください」

直助「元宮三太夫の娘、袖」

これは一体どういうことだ。間違いではないか。

どうしてこんなことに…どこで間違っただろう。

お袖は俺の妹だったのか…

与茂七「なぜ俺が死んだと思ったんだ」

お袖「お父さんの傍らに与茂七さんが着ていた着物と同じ柄の見覚えのある死骸が。顔が潰されていたのでてっきり…」

与茂七「…庄三郎どのが私の代わりに殺されたのか」

直助「そんな…浅草裏田んぼで殺したのは奥田の…」

与茂七「さては、お前が庄三郎を殺したんだな」

直助、出刃を自分の腹に突き刺す。

直助「俺は人の皮を着た畜生だ。お袖を自分のものにしたくて与茂七
といういいなずけを殺そうとした。そいつがいなくなれば、き
つと振り向いてくれると思っただ。まさか暗闇にまぎれて殺
したのが、恩を受けたかつての主人の息子とは…親やいいなず
けの敵を討つてやると、枕をかわしたお袖はこの俺が血を分け
た妹だったとは。俺は主人を殺した。俺は畜生だ、情けない…」

与茂七どの、お袖の親父を殺したのは民谷伊右衛門だ」

与茂七「なに、民谷伊右衛門が左門どのを…なんということだ」

直助「どうか…お袖のために敵を討つてやってくれ…」

何がいけなかったのか。どこから間違っていたのか。

数奇な運命をたぐり寄せてしまった、お袖と直助。

二人の死骸に与茂七はそっと手を合わせた。

六場 蛇山庵室

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

今宵は七夕。鷹狩りに出かけた伊右衛門は手飼いの鷹が逃げたので探し歩いてきた。そこで伊右衛門はある美しい娘に出会った。

伊右衛門「こちらに鷹が飛び込んで来ませんでしたか」

娘「はい、その鷹は私のそばにとまっておりますわ」

伊右衛門「そいつを私に返してはくれないか」

娘「あなたさまの鷹でしたら、ご遠慮なくお持ち帰りください」

伊右衛門「それは助かる。ではもらって帰るが、こう暗いと道に迷うかも知れないな」

娘「暗くありませんわ。今夜は七夕祭り、お月様があのようにあがってまるで昼のようでございます」

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

伊右衛門「ところで、そなたはこのあたりの者か」

娘「ええ、ただの田舎育ちの娘でございます。あなたさまは」

伊右衛門「私は民谷伊右衛門と申します。それで、そなたの名は」

娘「はい、私の名前は……」

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

お岩「伊右衛門さま」

伊右衛門「そなたはお岩ではないか」

お岩「私が恋慕うのはあなただけでございます」

伊右衛門「お岩によく似た娘。こっちへ来るといい。さあ、人の見ない間に」

お岩 「そのように移り気な心。うらめしや、伊右衛門どの」

伊右衛門 「これは…お岩の執念か」

お岩 「ともに地獄へ参りましょう。きたれや、民谷」

伊右衛門 「おのれ、お岩め。立ち去れ、立ち去れ。おのれ、成仏しろ」

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

伊右衛門 「今のは…夢か…なんと恐ろしい」

僧侶 「大丈夫か、伊右衛門どの」

ここは蛇山にある庵室。高熱にうかされ日ごとに伊右衛門はやつれていった。

出会った頃のお岩との楽しいひとときの夢。それは儚く消え去ると地獄から火の車で迎えにくるお岩に苦しめられる。

伊右衛門 「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」

何人もの坊主が懸命に念仏をとなえているが、忌まわしい悪夢をふり払うことは出来なかった。

伊右衛門 「もうこんな時間か…また今日も熱病に悩まされるのか…」

伊右衛門は午後六時ごろになるときまって、にわかの高熱に襲われるのだ。昔からの刻限は幽霊がでる時刻。

伊右衛門 「お岩の亡霊のしわざに違いない」

伊右衛門は門口を開け一面の銀世界をながめた。昨夜からの雪が降り積もり見渡すかぎりの雪景色である。

ふと軒下に吊ってある提灯に目をやると、ゆらゆらと揺れている火がたちまち赤ん坊を抱いているお岩に姿をかえて伊右衛門の前に現れた。

伊右衛門にとってはもう何を見てもお岩に見える。

伊右衛門「ああ…なんと執念深い女。お岩よ、伊藤喜兵衛の孫娘を嫁にとったのは高家へ入り込み、討ち入った者たちを手引きするため
の計略だ。俺は怨まれる筋合いなどない。それを浅はかな女の
怨みから喜兵衛とお梅を俺に殺させた。ああ、お前は世にも恐
ろしい女だ」

伊右衛門はもはや自分でも正気かどうか分からなくなっていた。苦し紛れの言いわけも、それがそもそもの真実であるかのように感じている。

伊右衛門「その腕に抱いている赤ん坊は…（赤ん坊を受けとり）俺がこの子を育ててやるからお岩、どうか成仏してくれ」

ヒヒヒヒヒ（色んな笑い声が聞こえる）

伊右衛門「許してくれ、お岩。許してくれ」

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

念仏をとなえるとその姿は消え、伊右衛門の手には石地蔵があるばかり。

伊右衛門「これはまことに恐ろしき執念だ」

再び、色んな笑い声と念仏が聞こえてくる。

伊右衛門「…おのれ、死霊め」

半狂乱になった伊右衛門はひたすら虚空を斬りつけた。

暗転

その後、伊右衛門は佐藤与茂七によつて成敗され物語は幕を閉じた。

町では女の幽霊が伊右衛門にとり憑き、敵討ちの助太刀をしたという噂がまことしやかに語られた。

果たして伊右衛門が見たものは何だったのか。

真実を知るものは今はもう何処にもいない。

お岩「伊右衛門さま、共に参りましょう。私はどこまでもあなたを愛しております」